



茨城県立図書館「知の探究セミナー」

2025.3.9(日)

渋沢栄一と弘道館・偕楽園

—大正五年水戸訪問の記録から—

小坪のり子(弘道館主任研究員)

1. はじめに

渋沢栄一『現代語訳 論語と算盤』守屋淳訳「はじめに」より

会社に出勤するため、いつも通り JR に乗って日経新聞をひらいた。ふと目をやると、車内吊り広告にサッポロビールのうまそうな新製品の宣伝がある。帰りに買って帰ろうと思いながら、お金を下ろすのを忘れていたことに気づき、会社近くのみずほ銀行のATMに寄る。そういえばもう年末、クリスマスは帝国ホテルで過ごして、初詣は明治神宮にでも行くかなあ。その前に聖路加病院に入院している祖父のお見舞いにも行かなくっちゃ…。

*この文章は年末の何気ない心象風景を記したものだが、渋沢栄一は文中の JR・日経新聞・サッポロビール・みずほ銀行・帝国ホテル・明治神宮・聖路加病院のすべての設立に関わる。→「日本資本主義の父」

《渋沢栄一について》



国立国会図書館デジタルコレクション

渋沢栄一は、天保 11 年(1840)に武蔵国榛沢郡血洗島村(埼玉県深谷市血洗島)に生まれる。

幼少の頃から学問を好み、読書や剣術の稽古に励む日々を過ごし、14 歳頃になると家業である農業や藍葉の仕入れにも勤しんだ。嘉永 6 年(1853)のペリー来航など、日本に大きな変化の波が押し寄せてきた時代、「尊王攘夷」思想の影響を受けた栄一や従兄弟らは、高崎城乗っ取りの計画を立てるが中止し、京都へ向かう。

元治元年(1864)に 25 歳で一橋徳川家の家臣として慶喜に仕え、幕臣にもなった栄一は、慶喜との厚い信頼関係を結んでいく。慶応 3 年(1867)には、徳川昭武のフランス渡航の随員としてパリ万国博覧会をはじめヨーロッパ各国を見聞し、この経験が栄一の針路に大きな影響を与えることになる。大政奉還にともない、明治元年(1868)に帰国した栄一は、大蔵省で実績をのこした後、実業界で才能を発揮していった。栄一は経済と道徳の一致を重んじながら数多くの会社の設立に携わり、日本の実業界、さらには資本主義の礎を築いた。また、社会事業にも尽力し、生涯にわたり私心なき活動を続ける。昭和 6 年(1931)、92 歳で永眠、谷中墓地(東京都台東区)に埋葬された。

2. 渋沢栄一の水戸訪問

(1) 水戸訪問の理由

大正 5 年(1916)5 月 27 日~29 日関東・東北・北海道感化院長協議会が水戸で開催
→栄一は中央慈善協会会長として講演をするため、5 月 28 日・29 日の 2 日間水戸を訪問

*感化事業: 貧困による少年少女の非行防止と自立支援

(2) 水戸訪問の行程—『龍門雑誌』337号(大正5年刊)より—

【5月28日】

8:10 上野駅発

土浦駅・石岡駅で関係者の出迎えを受ける

11:52 水戸駅着 知事・市長等の出迎えを受ける

水戸公会堂(昼食)・弘道館孔子廟見学

13:00 弘道館 感化院長協議会で講演

彰考館閲覧・偕楽園観覧

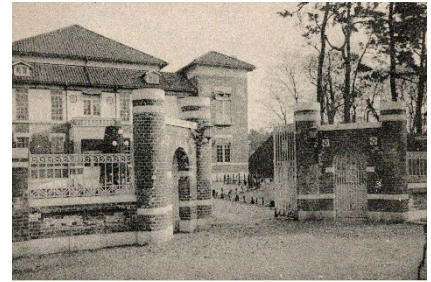
19:00 水戸公会堂 歓迎会

清香亭(宿泊)

【5月29日】

9:00 県立商業学校 講演

11:30 水戸駅発

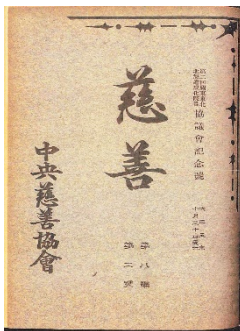


水戸公会堂



孔子廟

3. 弘道館での講演録から



渋沢栄一の弘道館での講演については、中央慈善協会の雑誌『慈善 第八集第二号』(大正5年刊)に講演録が収録されている。また、栄一を慕う人々によって発刊されていた『龍門雑誌』をはじめ、伝記などにも転載されている。

国立国会図書館デジタルコレクション

元来私は水戸派の学問を深く修めた人から多少漢籍を学びました、処で水戸学に対しては子供の折から深い感じを有つて居ります、

《惇忠と水戸学の影響》

尾高惇忠(1830-1901): 栄一の従兄で学問の師。惇忠は12歳の時に徳川斉昭が行った追鳥狩を見学したことを機に水戸学にあこがれ、関連する書籍を多く取り寄せていた。

→ 栄一は8歳頃から惇忠のもとで学び、「知行合一」の考えや水戸学の影響を受ける。

栄一が水戸学から受けた影響

水戸学は、水戸という狭い範囲の学問ではなく、日本全体の歴史を探究することによって、現在を見つめ直し、さらに将来への展望を開こうとする、スケールの大きな学問。西欧列強が迫りくる、先行き不透明な幕末の時代の中で、渋沢栄一は水戸学を学びつつ、自分の生き方や国家の行末を真剣に考えようとしていたのではないか。

※ 彰往考来: 過去を明らかにして将来を考える(『大日本史』編纂所「彰考館」の名称の由来)

水戸藩の学問: 先見性・実践性・国家的視野

のみならず先年薨去せられました慶喜公が一つ橋に在らせらるゝ頃に、私は御奉公をして一つ橋の家来となりました、

徳川慶喜(1837-1913)

水戸藩 9 代藩主徳川斉昭の七男で、御三卿一橋徳川家を相続、のちに江戸幕府 15 代将軍となる。

*一橋徳川家は、京都で会津藩、桑名藩と連携して活動し、朝廷の警護や京都市中の治安維持にあたる。

《栄一の一橋徳川家仕官》

栄一は従兄弟らと高崎城乗っ取りを計画するなど、尊攘派の志士として活動する中で身の危険が迫り、京都へ向かい、平岡円四郎の奨めで一橋徳川家に仕官する(篤太夫と改名)。栄一は、一橋徳川家の有力な家臣や慶喜に従う水戸藩士、西郷隆盛など多くの維新志士と交流した。

其一つ橋公は御承知の通り烈公の御子で七郎丸と申され、御幼少の折には弘道館で漢字<学カ>を修めた御方でございます、

《慶喜が学んだ弘道館》

慶喜(幼名:七郎麻呂)は、天保 8 年(1837)に徳川斉昭の七男として江戸小石川水戸藩上屋敷で誕生。母は正室・吉子(有栖川宮織仁親王女)。斉昭の教育方針で生後約半年で水戸に移る。天保 12 年、5 歳の時に弘道館開館。「弘道館御用留」の天保 14 年 12 月 13 日の記事に、七郎麻呂(7歳)が兄弟の五郎麻呂とともに弘道館で学び始めたことが記されている。

九歳<十一歳カ>のときに一つ橋家を御相続になり、爾来烈公は屢々小石川の御屋敷に御呼びになつては、御自身に訓誡のあつたと云ふことは委しく記録に書いてございます、

《慶喜の一橋徳川家相続》

弘化 4 年(1847)9 月、11 歳の七郎麻呂は御三卿一橋徳川家を相続。同年 12 月に元服し、12 代将軍家慶の一字を賜り、諱(実名)を慶喜と改める。

*御三卿(田安徳川家・一橋徳川家・清水徳川家)は、徳川将軍家の一門で、将軍の跡継ぎがない場合には、徳川宗家および将軍職を継承できる最有力の家柄。

→一橋徳川家を相続した慶喜に対し、斉昭は父として教育に力を注ぐ。

私は一つ橋家に於て慶喜公に数年御奉公を致し、夫から続いてフランスに参りました、

《一橋徳川家での栄一》

栄一は、一橋徳川家家臣団の増強や財政の立て直しなどに取り組み、人事・財務面で才能を発揮する。

《フランスへ》

慶応2年(1866)、将軍慶喜がパリ万国博覧会に派遣する使節団の代表に弟・昭武を指名。栄一は随行員の一人に選ばれ、慶応3年1月に横浜から渡仏、庶務・会計を担当。

此フランスに参つて居りましたのも慶喜公の御令弟与八様—民部大輔昭武と仰せられた御方の御供をして参つたので、そして恰度明治元年に帰りまして、暫時昭武様に昵近致して居りました、

徳川昭武(1853-1910)

徳川斉昭の十八男で、御三卿清水徳川家を相続、のちに水戸藩11代藩主となる。

慶応3年(1867)パリ万国博覧会に幕府の代表として出席。万博終了後は留学を予定。

《フランスから帰国》

慶応3年10月の大政奉還、慶応4年4月の水戸藩10代藩主慶篤の急逝により、昭武や栄一らが日本に帰国(慶応4年9月4日マルセイユ港からフランスを離れ、〈9月8日明治改元〉明治元年11月3日横浜に到着)。

私が日本に戻つた時は江戸は東京になつた頃で、昭武公は水戸に御出でになつて水戸家の御相続をなされました、

《慶喜の弘道館での謹慎》

大政奉還後、徳川慶喜は江戸城を出て上野寛永寺で謹慎。続いて弘道館の至善堂で慶応4年(明治元年、1868)4月15日から約4か月間謹慎した後、駿府へ。



弘道館至善堂御座の間

《昭武の水戸徳川家相続》

明治元年11月に水戸徳川家を相続し、11代藩主

となった徳川昭武は、明治2年6月版籍奉還により藩知事となる。同年10月から約1か月間弘道館に滞在し、柵町御殿に転居。明治4年廃藩置県により職を解かれ、以降は東京小梅邸で過ごす。明治16年慶篤の長男篤敬に水戸徳川家の家督を譲り、松戸に戸定邸をつくる。

私は慶喜公が駿河に在らせられたので彼処に参りました、

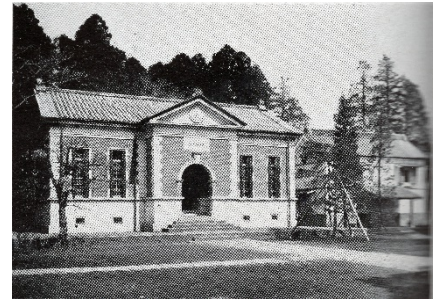
《慶喜のいる駿府へ》

水戸を退去した徳川慶喜は、駿河国駿府（静岡）の宝台院で謹慎を継続。
帰国後、栄一はヨーロッパ滞在の報告と徳川昭武からの手紙を渡すため、慶喜を訪ねる。
栄一は慶喜の返書を昭武に届ける予定であったが、駿府にとどまる。
明治2年（1869）駿府藩（静岡藩）に商法会所設立。
同年11月に明治政府の依頼で東京にもどり、民部省（大蔵省）に仕官。
※明治6年に大蔵省を辞任、実業界へ。

4. 彰考館・偕楽園での栄一

(1) 彰考館での「大日本史草稿」閲覧

弘道館での講演の後、栄一は人力車で彰考館・偕楽園を訪れる。当時、常磐神社東にあった彰考館では、徳川光圀の書き込みがのこる「大日本史草稿」や関連史料などを1時間ほど閲覧。



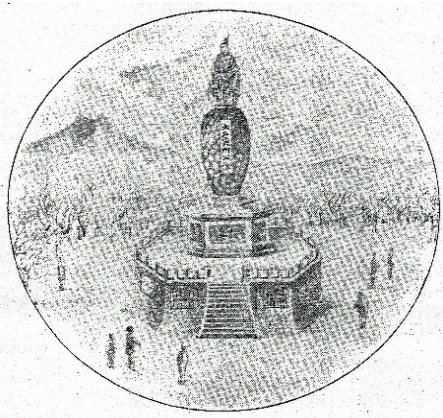
彰考館
『水戸名家遺墨集』より転載

(2) 偕楽園観覧

偕楽園では、偕楽園記碑に刻まれた斉昭の「領民とともに楽しむ」という造園の主旨に、栄一は感銘を受ける。
また、斉昭の設計による好文亭内も熱心に見学。

※偕楽園観覧後、栄一はいったん水戸公会堂に戻り、歓迎会に出席してから、偕楽園東側の常磐神社近くにあった清香亭に宿泊。清香亭は、伊藤博文など著名人も訪れた有名な旅館。

《幻の徳川光圀銅像》



『水戸黄門公実録』より転載

明治後期から大正初期に、偕楽園中央に全長9m以上の徳川光圀の銅像を建造する計画=難航
大正3年（1914）渋沢栄一に計画推進を相談
→栄一は世間での銅像の乱立に反対していたが、
「義公の如きは単に水戸の人傑ならず日本の人傑にて国民渴仰の標的たるべき人なれば、公の銅像建設には応分のことは為すべき」（『龍門雑誌 第318号』大正3年刊）と協力
→推進者田中伸稻の死去後、計画は低調し実現せず

5. 県立商業学校での講演

弘道館で講演をした翌日の5月29日、栄一は県立商業学校に招かれ講演を行う。

同校『校友会誌』（大正6年刊）には、栄一の講演要旨が以下のように掲載されている。

「商人に人格修養の最大切なること。経済と道徳と一致するにあらざれば真の意味の国力発達にあらざること。昔は商工業は単に武力を張るの必要上より之が存在を認められしも今日は富力其者が国の生存上必要視せらるゝに至りしこと然るに今日未だ商業家の理想低く或厭はしき現象の存在するは誠に遺憾に堪へざること。」

※『交友会誌』（大正6年刊）の「大正五年購入書籍一覧」には、大正5年9月に出版された栄一の代表的書籍『論語と算盤』が記載。

6. 栄一が語った弘道館・偕楽園の印象

※弘道館での講演から2か月後に栄一が語った水戸訪問の感想が『村莊小言』に収録。

(1) 弘道館の印象

「弘道館には「遊く遊く於藝」と題した大きな扁額が掲げられてあつて、これは烈公が天保十二年（七十五年前）に、六藝に通ずる士を養はんとの御精神より建設せられた一種の道場である。其處では、文武礼楽射御算数より鉄砲の操練、医術の末に至るまでを、課を分つて藩士と其子弟とに教へたものである。」

*徳川齊昭書 扁額「游於藝」

「游於藝」は『論語』の言葉で、「藝」は六芸（礼く礼儀・楽く音楽）・射く弓術・御く馬術・書く習字・数く算数）のこと。



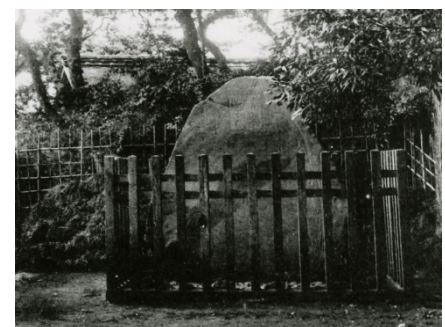
国会図書館デジタルコレクション



弘道館正庁「游於藝」

(2) 偕楽園の印象

「それから、彼の偕楽園も烈公の築造せられたものであるが、自ら独り楽しまんが為に造られたものでなく、農業に従事する芻蕘の者も狩猟に従事する雉兔の者も共に往つて遊ぶを得たので、方七十里あつても未だ小なりとせられたと伝へれる。孟子梁恵王章句下」に所謂「文王の囿」に等しいものに偕楽園をして、庭園を士農工商に公開し、衆と偕に楽しまうとの御趣意から造られたものである。園内



偕楽園記碑

にある好文亭の構造なぞも座席に上下の区別がつかぬやうにしてあり、誰でも文を好む者が其處に罷出で君公と上下の区別なく文事を楽み得らるる構造になつて居る。」

*「文王の囿」は、齊の宣王が、「私の囿（御苑）は四十里四方しかないのに、民は広すぎると文句を言うが、周の文王の囿は七十里四方もあったそうではないか」と言ったので、孟子が、「文王の囿には、草刈りや木こりや狩人も自由に入ることが出来たのです。だから七十里四方でもまだ小さいと言ったのです。」と答えた（大意）という『孟子』の逸話。

7. 栄一が残したもの

※弘道館が開館する前年の天保11年(1840)に誕生した渋沢栄一は、幕末から明治・大正・昭和と激動の92年の生涯で、多くの足跡を残した。

(1) 栄一と徳川慶喜

栄一は、日本を支える様々な企業を導くいっぽうで、主君慶喜のもとに通い名誉回復に努める。『徳川慶喜公伝』の編纂事業は、明治時代をとおして継続した名誉回復活動の集大成であった。大正2年(1913)、慶喜は77年の生涯を閉じ、栄一は葬儀委員長を務める。その葬儀は壮大なもので、見送る人々は最後の將軍の死とともに江戸時代・武士の世界が去ったことを実感したという。栄一が弘道館で講演をしたのは、慶喜の墓前に『徳川慶喜公伝』(刊行は大正7年)の完成を報告する少し前のことだった。

(2) 栄一と国際親善

70歳で実業界の第一線から身を引いた栄一は、社会事業や国際親善に力を注ぐ。大正以降悪化する日米関係改善の一環として、子供どうしの親善を図る「青い目の人形」の贈答にも尽力した。不穏な世界情勢の中で国際親善に努めたことが評価され、ノーベル平和賞候補に2度も選ばれる。

(3) 栄一と「論語と算盤」

『論語』とソロバンは、はなはだ遠くて近いもの(渋沢栄一『現代語訳 論語と算盤』守屋淳訳より)

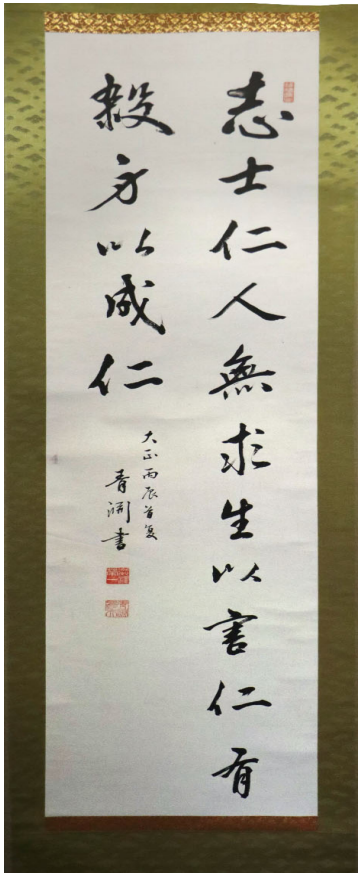
わたしが七十歳になったときに、友人が一冊の画帳を造ってくれた。その画帳のなかには『論語』の本とソロバン、一方にはシルクハットと大小の朱色に塗った刀のサヤが描いてあった。ある日、学者の三島毅先生が、わたしの自宅にいらっしゃって、その絵を見られると、こういわれた。「とても面白い。わたしは『論語』を読む方で、おまえはソロバンを探求している方だ。そのソロバンを持つ人が『論語』のような本を立派に語る以上は、自分もまた『論語』だけで済ませず、ソロバンの方も大いにきわめなければならない。」(中略)わたしは常々、モノの豊かさとは、大きな欲望を抱いて経済活動を行ってやろうというくらいの気概がなければ、親展していかないものだと考えている。空虚な理論に走ったり、中身のない繁栄をよしとするような国民では、本当の成長とは無関係に終わってしまうのだ。(中略)国の富をなす根源は何かといえ、社会の基本的な道徳を基盤とした正しい素性の富なのだ。そうでなければ、その富は完全に永続することができない。ここにおいて『論語』とソロバンというかけ離れたものを一致させることが、今日の急務だと自分は考えているのである。

栄一にとっての『論語』(渋沢栄一『現代語訳 論語と算盤』守屋淳訳より)

明治六(1873)年に官僚を辞めて、もともと希望していた実業界に入ることになってから、『論語』に対して特別の関係ができた。初めて商売人になるという時、ふと感じたのが、「これからは、いよいよわずかな利益をあげながら、社会で生きていかなければならない。そこでは志をいかに持つべきなのだろう」ということだった。そのとき、前に習ったことのある『論語』を思い出したのである。『論語』には、おのれを修めて、人と交わるための日常の教えが説いてある。『論語』はもっとも欠点の少ない教訓であるが、この『論語』で商売はできないか、と考えた。そしてわたしは、『論語』の教訓に従って商売し、経済活動をしていくことができると思い至ったのである。

《参考》

(1) 渋沢栄一が後藤栄寿に贈った書



後藤家所蔵

志士仁人無求生以害仁
殺身以成仁
大正丙辰首夏
青淵書

※この渋沢栄一書には、大正5年5月16日に記された後藤栄寿宛の書簡が付されており、栄寿が同年5月28日～29日の栄一の水戸訪問に関わっていた可能性が考えられる。

〈読み下し〉

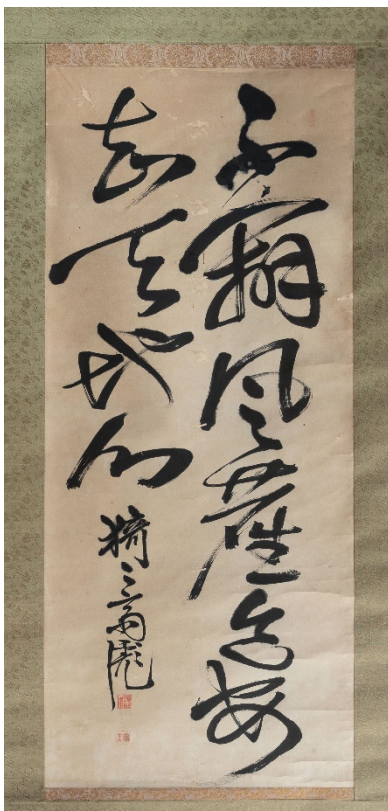
志士仁人は、生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り。 (出典：『論語』衛霊公)

〈大意〉

志士や仁者は、自分の生存のために博愛の徳にそむくようなことはしない。自分の生命を捨てても、人道をまっとうするものである。

*大正丙辰首夏=大正5年夏の初め
*青淵=栄一の号

(2) 渋沢栄一所蔵藤田東湖書



弘道館所蔵

不辨風塵色安
知天地心猗々齋彪

※網代茂著『水府巷談』によると、この藤田東湖書は栄一が愛蔵していたもので、栄一の没後に孫の敬三から大洗町出身の飛田氏に贈られ、昭和39年に同氏から弘道館に寄贈された。

〈読み下し〉

風塵の色を辨ぜずば
いづくんぞ天地の心を知らん
(出典：張巡「軍中間笛」『全唐詩』)

〈大意〉

戦況の現実をきちんと認識することがなければ、天地の心、すなわち正しく戦況を判断する心をもつことができないのではないか。

*「猗々齋」は東湖が城下横竹熊に塾居していた嘉永2年前後の書齋の名称(「古希真蹟序」『東湖全集』)

《参考》渋沢栄一略譜

和 暦	西 暦	年 齢	で き ご と
天保 11 年	1840	1	2月 13 日渋沢家(中の家)の長男として生まれる。
弘化 4 年	1847	8	従兄尾高惇忠から漢籍を学ぶ。
文久 3 年	1863	24	高崎城乗っ取り、横浜焼き討ちを計画するが中止し、京都へ向かう。
元治 元年	1864	25	平岡円四郎の奨めで一橋徳川家に仕官、徳川慶喜に拝謁。
慶応 2 年	1866	27	徳川慶喜 15 代将軍就任に伴い幕臣となる。
慶応 3 年	1867	28	徳川昭武のフランス渡航随員となり、パリ万国博覧会などを視察。
明治 元年	1868	29	フランスから帰国。駿河国駿府(静岡)で徳川慶喜に面会。
明治 2 年	1869	30	駿府藩(静岡藩)に商法会所設立。明治政府の依頼で民部省(大蔵省)に出仕。
明治 6 年	1873	34	大蔵省を辞任。第一国立銀行創立・総監役に就任。
明治 9 年	1876	37	東京市養育院事務長に就任。
明治 11 年	1878	39	東京商法会議所(のちの東京商工会議所)創立・会頭に就任。
明治 17 年	1884	45	日本鉄道(明治 14 年設立)の理事委員に就任。
明治 18 年	1885	46	東京府会養育院廃止に反対し独立。日本郵船会社創立。
明治 19 年	1886	47	「竜門社」創立。東京電燈会社創立委員に就任。
明治 20 年	1887	48	帝国ホテル創立・理事長に就任。
明治 22 年	1889	50	水戸鉄道開業、株主として参加(明治 25 年に日本鉄道に合併)。
明治 39 年	1906	67	鉄道国有化に尽力。日本鉄道解散。
明治 42 年	1909	70	渡米実業団団長としてアメリカ 53 都市巡回。中央慈善協会会長就任。
大正 5 年	1916	77	関東・東北・北海道感化院長協議会のため水戸を訪れ、弘道館で講演、偕楽園を観覧。渋沢栄一述『論語と算盤』刊行。
大正 7 年	1918	78	渋沢栄一著『徳川慶喜公伝』刊行。
大正 9 年	1920	81	社団法人国際連盟協会創立・会長に就任。子爵を授けられる。
大正 10 年	1921	82	ワシントン軍縮会議視察のため渡米。
昭和 元年	1926	87	ノーベル平和賞候補になる。
昭和 2 年	1927	88	再びノーベル平和賞候補になる。日米親善人形歓迎会を主催。
昭和 6 年	1931	92	11 月 11 日永眠、谷中墓地に埋葬。

《主な参考文献》

渋沢栄一『現代語訳 論語と算盤』守屋淳訳(ちくま新書)

『学習まんが 渋沢栄一』渋沢史料館監修(集英社)

『渋沢栄一の「論語講義」』守屋淳編訳(平凡社)

『雨夜譚 渋沢栄一自伝』長幸男校注(岩波文庫)

『尾高惇忠 富岡製糸場の初代場長』荻野勝正著(さきたま出版会)

『父より慶喜殿へ 水戸斉昭一橋慶喜宛書簡集』大庭邦彦著(集英社)

『没後 100 年 徳川慶喜』松戸市戸定歴史館・静岡市美術館編集発行

『プリンス・トクガワ』松戸市戸定歴史館編集発行

『渋沢栄一渡仏一五〇年 渋沢栄一、パリ万国博覧会へ行く』渋沢史料館編集発行

*公益財団法人渋沢栄一記念財団 HP もたいへん参考になりますので、ぜひご覧ください。